

季寄
註解

改正月令博物筌

十月部

一

058
俳諧資料カード

年代

編者
(筆者)

書名

備考

(下垣内蔵)

改正月令博物筌冬冬之部

十月部目錄

△印ハ俳偈の季
をりハ物あり

養生の法。雨風の考。米の豊凶。妙藥其外人家重宝の事ハ取々あり也。目錄ニハある事ハ

發端 冬ニ由來 冬ニ異名

發

十月

卦ハ 坤 月支 調子 陰陽生 異名

十

立冬節

十月十六日

十

十月日令

此部ハ十月日の定アレる事支の定アレる事と集めたる也

十月更衣

十月

十月拜墳

十月

十月進炉炭

十月

十月神送

十月

十月御玄楮

十月

十月達磨忌

十月

十月夜

十月

和興福寺法花會

十日 讀川金毘羅祭 寺 十日 南都維摩會 寺

十一日 芭蕉忌 寺 十一日 御命構 法花會式 寺

十二日 水官解厄 寺 十二日 下元 寺

十五日 出雲大社神事 神あり 十五日 惠比須講 寺

十六日 京聖一國師忌 寺 十六日 梅尾虫供養 寺

十五日 京法勝寺大衆會 寺 十八日 神迎 寺

十月令 此部より八日の定おろさる十月 一ヶ月の事をあつむ

御取越 寺 茶の口切 寺

巨燧明 寺 初霜 寺

初冬 寺 初霜 寺

時雨 寺 初霜 寺

片雨 寺 初霜 寺

松風 寺 初霜 寺

名木枯 寺 初氷 寺

初雪 寺 初氷 寺

冬ざれ 寺 冬籠 寺

冬構 寺 閉北窓 寺

草木 此部より十月の草木と集め

名山枯 寺 薄く 寺

冬椿 寺 早咲椿 寺

残菊 寺 冬牡丹 寺

天竺花 寺 冬菊 寺

水仙花 寺 八手花 寺

茶の花 寺 山茶花 寺

歸花 寺 寒梅 寺

枇杷花 寺 室の梅 寺

樞の花 寺 散紅葉 寺

散紅葉 寺 紅葉散 寺

室の梅 寺 室咲 寺

寒梅 寺 室咲 寺

散紅葉 寺 紅葉散 寺

△麥蒔むぎまき

草

△枯蘆くろあし

草

△枯柳くれやなぎ

草

△落葉らくえつ

草

△禾の葉こゝのへ

草

△木葉の雨このはのあめ

草

△朽葉くち

草

△蕪くさ

草

△大根だいこん

草

△冬木の櫻ふゆきのさくら

草

△雪の下ゆきした

草

△松の花まつはな

草

生類

爰より十月の鳥けだりの魚虫のこゝをあつめたるは

△鶯子啼うぐいすのこゝろ

草

必用

此部より十月一ヶ月の天氣乃見中其外必用の事との也

破軍向方はぐんむかう

草

日刻ひつゝ

草

出行作事しゅつぎやうさくじ

草

樂事らくじ

草

天氣てんき

草

占候せんかう

草

養生ようじやう

草

衣服式いふくしき

草

生花式正

草

料理献立りょうりけんたて

終

十月部目錄終

月令博物笈冬の部發端

九き内ハ書くるハ冬の氣の旺むる所ハ月令ハ日天氣上騰地氣下り降る天地通せり



天地のく其位を正ししるをいふ猶委一き

冬由來

釋名小曰冬ハ終之萬物終よ成る所以之と有これハ

冬ハ一年の終よてよりづの物成就

と訓せしハひもとり事ふといと五音相通なるなり

冬爲王

方ハ北とハ易の統圖小曰日冬ハ北方の黒道を行

これを北陸（北陸）といふと有よりて北を
 冬の方（北）ととる也。味ハ鹹（味）とつうさ
 ぐる事ハ冬の氣ハ水（水）ハ屬（屬）とる也
 海水の塩（塩）とゆきと味とす也。色も
 黒（黒）とい月令ハ天子玄堂（天子玄堂）の左介
 居（居）リ玄路（玄路）より鐵驪（鐵驪）ハ駕（駕）し
 玄旂（玄旂）と載（載）黒衣（黒衣）をきる（をきる）と有（有）く
 玄堂（玄堂）ハ北の方の堂（北の方の堂）とい（い）ハ玄路（玄路）ハ
 黒（黒）き車鐵驪（鐵驪）ハ（ハ）ろむ（ろむ）ま（ま）れ事（事）玄
 旂（玄旂）ハ（ハ）ろき（ろき）は（は）この事（この事）とて（とて）とら（とら）く
 黒色（黒色）と主（主）ととる（ととる）とい（い）ハ。臟（臟）ハ腎
 とハ（ハ）人の五臟（人の五臟）の内（内）にて腎（腎）ハ水（水）を主
 たる臟（臟）とる也（とる也）（冬（冬）ハ配（配）當（當）とる也
 氣（氣）ハ精（精）とハ腎精（腎精）を（を）り（り）也（也）。卦（卦）ハ坎
 とハ坎（坎）ハ水（水）の象（象）とる也（とる也）。星（星）ハ辰
 とハ辰（辰）星（星）北（北）とある（とある）なり。人（人）ハ智
 とハ腎（腎）ハ聞（聞）蔵（蔵）の官（官）少（少）て人（人）の智
 恵（恵）とく（く）す臟（臟）とる也（とる也）（智（智）ハ冬（冬）に
 當（當）るとも。神（神）ハ玄武（玄武）とい（い）ハこれ（これ）も黒
 き也（也）とて冬（冬）の神（神）ととる（ととる）なり

冬異名

玄英（玄英）。顓頊（顓頊）。玄冥（玄冥）。上天（上天）。
 清冬（清冬）。三冬（三冬）。九冬（九冬）。

和名（和名）。ころつ也。こも也。きなつけ

異名註

爾雅（爾雅）の註（註）曰（曰）氣（氣）黒（黒）く

して清英（清英）とあり。顓頊（顓頊）と
 禮記（禮記）ハ其帝（其帝）ハ顓頊（顓頊）と有（有）。玄冥（玄冥）ハ
 これも禮記（禮記）ハ其神（其神）ハ玄冥（玄冥）と有（有）。
 上天（上天）ハ禮記（禮記）ハ天氣（天氣）上騰（上騰）ると
 有（有）とあり。三冬（三冬）ハ東方朔（東方朔）の疏（疏）ハ出
 くる字（字）よて冬（冬）三月（三月）の事（事）とあり。
 九冬（九冬）ハ元帝（元帝）纂要（纂要）ハ冬（冬）と玄冬（玄冬）九冬（九冬）
 といふ。清冬（清冬）ハ皮日休（皮日休）詩（詩）ハ冬（冬）を
 清冬（清冬）と作（作）まり。ころつ也（ころつ也）ハ雲（雲）の
 御鈔（御鈔）ハ出（出）て雪氷（雪氷）とる也（とる也）も露（露）のこ
 り（り）るよりなれるものなる也（なる也）。冬（冬）
 をころつ也（ころつ也）といふなり。こもゆハ
 拾遺集（拾遺集）ハ出（出）て三冬（三冬）つきもりし
 きぬれハとよめて漢土（漢土）ハ三冬（三冬）
 といふも同じい。

哥秘蔵 きまつけ 小野峯雄

きまつけとちがむる末ハ八重玉履
立田れ山とささもめなくに

夫木 為相

波由もき入口の南まきうく
於日れそらせ冬のおげなき

非々書とおしむ隙はしそがき支考

ゆたげ 〇冬の朝の事
歌 蔵玉集

〇このころよあきてるんが白雲乃
庭もそらに霞はけりこのれ

らんのむめ 〇冬を主の神くまの
神を佐保姫とい

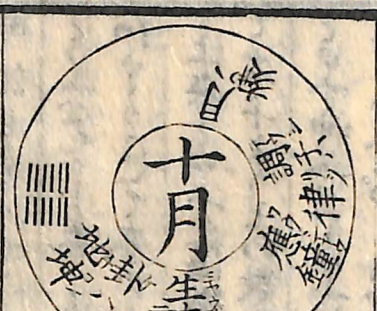
其の神をつと娘とい秋を秋田姫
といいつきも童蒙抄に半ら春

秋ハ秋の季に用由るゆも亦に委
しく註に秋まきも神祇おらば季

の氣を主の造化の神おてはる存るこ
〇右の外三冬みこころる季節此
りの別三冬の部有

十月の部

△印と記に分ハ
季とり物



其至小生じなる
一陰の上小月々
にまこ二陰つ
はハ六陰とさう
て純陰の月

〇調子ハ律子より應鐘といハ水
の成長しるこト禮記月令ニ出應ハ

陽ハ應どるなり鐘ハ動くとい
し心よて萬物動きさうなる

卦ハ地坤とハ上の圖れどく極
陰よて地のこころ

十月異名 △上冬 △開冬 △玄冬
陽月 △良月 △孟冬

秦正 △小春 △初冬
秋の月 △秋の月 △初冬月

志の月 △上冬 △初冬月
初冬月 △小六月 △こを序

異名註。陽月とハ此月一陽也

雅は出づり。良月ハ左傳は出

しより十ハ數の満る事を良と

しより一ハ左傳の注は見えり

孟冬ハ月令は出はづりの冬と

り義之。上冬ハ纂要は出これ

もはづりの冬とりの事之。開冬

とハ顔延之の詩は作まり冬

こぞらとり事之。玄冬これ纂要

は出てはづり冬之。秦正ハ歲

時記出秦の世の正月はあつる月

といふ心之。小春ハ事文類聚ハ十月

のころはして春のどきといふとあり

。上無といふハ陰陽の數り下り九

ておて十より上の數はしつて此月盡

といふ。神無月といふハ此月神々出雲國

集るハ故名づく出雲ふてハ神有月と

いふ又一説に此月の異名上無といふは

より俗訓つて神無月といふより

又真泚の詠ハ此月雷聲と出

さづり也。雷無月といふともいふり

。此月伊弉册尊崩じり月

ゆハ名つくと世間問答は出づり

。貝原氏の説ハ卦はかたてハ坤

として純陰ふあれハ陽未復陽

なきの月ハ神ハ陽の司也。此月陽

なきの月のハ神無月といふ諸神出

雲ハあつまりり。あつといふと

跡くるとなき事とあり其外

説多し委しく日本歲時記に

あるは然きとも風雅の道ハ此論ハ

不拘神なき心とよむが風情あり

てよ。次ハ證哥と出し作例と次

哥 秘藏 神なり月 菅原忠音

下ハちまハあつたれなはなりふり

志ぐれひまなき神なり月

莫傳 神なり月

出づりハ松のきふ此ハあつてハ

神なり月と何と云ふ

千載 神正月 道因法師

何らし吹ひくはるねの福とに
あられ時ある神正月う那

新古今 神正月 高光

神正月風よ紅まのちる時ハ
そこはうとなくおづかき

神正月鷹鞆の口に木の葉の野水

十月ハ小傍の石見見ふく支考

神正月髪を人もさむいの園十

垣るんやたうまの神正月支考

哥 藏玉 志づれ月

ちりててこの後の一づれ月

冬れをじめよ何とそあまじ

同 五の志づれ月

冬も本と初お月のねぼけけ

るがちも白きけこのとらうこ

非 鵲鴿の尾さすまる小恙の 后女

房がゆもぬもよふまこ小恙の 人男

立 冬 節の名。七十二候。草木七十三候
昼夜長短。日の出入左よ記



十月の節と

立冬と

冬は

はじ

光の

節なる

まじなまり

此頃水始て氷了。木の葉落散

つくとく。地始て氷とハはじ免に

水が氷つきてそれよりだんく地も

いてるとし事。芳艸爲新とハ

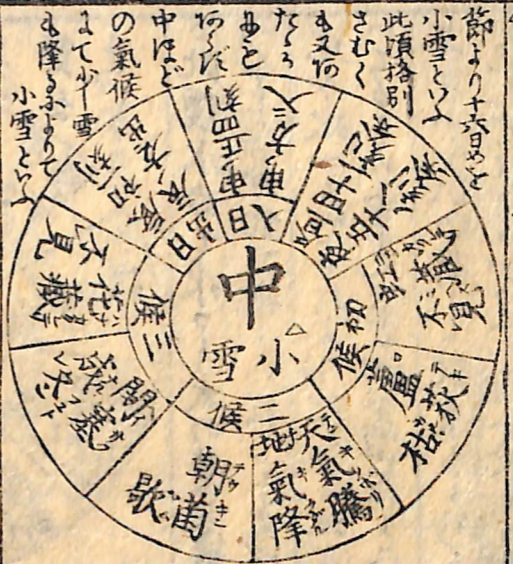
よきふゆいの有し秋草もこれく

おれしだにさるをり。雉入大水爲蜃
月令の注よ蜃ハ蛟のこひこれを
こづりのもひそまるりのふちりうる
とりのこぞ。苔枯ハ草木ばうん
よあらば苔よてう枯るとり事
哥 千載 万葉のまぢもそハお
かねぬゆづりまぢまぢまぢ

節の占候 立冬の日土ふあられ来
羊麦貴し田耕宜し

壬子なれば来年大熱し節の日晴れ
来春雨多し北風あれば六畜ふよむひかり

小雪 中の名七十三候。草木七十二候
日出入。昼夜長短。左よ記に



虹藏不見ハ此頃より来三月まで
虹ふらふとなきをり。芦荻枯あしねぎ
枯る。天氣騰地氣降とハ天の陽
氣去りて地の陰氣下る也寒氣
ぜんぐにりよふと。朝苗歌を
なびびせせざる。閑塞成文と

陽氣ふきがりて寒き冬ことわり
あり。花藏不見ハ花ハ大抵陽氣
と得てひくくとのあ陽氣なき
時なればかくれて不見あり

日令 此部ハ日の定まる事
并よ支の定まる事と出

朔 今日沐浴と一し長壽よちる
日 今日房事と第ふつしむべし

朔 更衣 今日天子御装束と
改りて之南殿不出

御ちりて節會行りて二献の後
氷魚と群臣よふ公筆根元出

哥 元弘立后屏風
流れる御代の頁とよむひを
大宮人よふくしうふたり

非 湯衣 湯衣をいひ名袖の皮 也有

朔 更衣 十月朔日先づ御衣がけり
掃部寮夏の御装束と

撤して冬の子改りて天皇南殿
不出御ありて節會行りて是を孟

冬の旬といふ。衣更とばういふ季。四月

俳向たまの袖と成けり更衣 李下

朔 衣服式 諸家合自より来年二月晦迄冬衣袍と着せり紀傳

朔 拜墳 唐土より今日貴賤ともに先祖の墳と拜し祭とい首原

説も本朝よても今日先祖と祭るべしといり唐日本の祭を委しく歳時記出

朔 進爐炭 唐よ今日有司爐煖炭と奉り事文類聚より出

朔 燂燔食 峽人十月朔日多燂燔裏と作て節物とい荆

楚の人多く燂燔と食ひ或ハ糖と爲事文類聚より出燂燔といハ酒の淨

こかたるやる物又燂燔の事と蒸裏をいハ蒸裏といつとていハ物といハ

朔 爐開 煖爐會爐開會今日爐と開き三月廿日爐と云

唐よて今日爐と開き爐中にて肉とてぶ了飯ハ是とたる會といハ歳時雜記出

此例よより本朝茶人此日より爐と開き賓客と茶を喫詩有歳時記出

神送 神の旅△神の留守。此日諸神出雲の大社臨幸し

といり委しくハ日本歳時記に出り面白き事とるべし

俳 苗のひはまの神の石と野水かつきの神おほき流出ハ蘇守

狂 馬ならんで風と神のかしま立木の葉とくりて行 真魚

亥 御玄猪 △玄猪餅 △御巖重 △亥の子 △能勢餅

昔ハ山猪を奉る事 日本記等出 應神天皇の御代より毎歳

亥の月亥の日を祝い御玄猪の餅と奉るき詔ありて

攝州能勢郡木代村切畑村兩村より貢とい。餅を製衣とる

當家ハ能く清め赤小豆と餅米とよて餅とんきくの花かえて

志のぶの花葉とかいしきとん色
 らす赤しこれい家の子に肉が
 表しころこ下學集より白承ハ毎
 年十二子を生む閏年ハ十三子を
 生む故よ婦人これを祝ふといり
 されば童謡よ亥れ子のりちハ親うめ
 子うめといふハ此故あるう。十月亥の
 日ハ餅をまくハ無病長生あり 麴齡
 其外委しくハ歳時記拾遺ハ出り
 女の祝すけなご甚面白し見るぶし
 哥蜻蛉日記二万代といふ山邊の
 いのことより君がつらるよをひちるど
 狂 降答とあうよづねふきりしが
 さてもいこの腹れ急ごく 貞松

上 今日槐の実を食四不成 今日房事
 巳 是れハ百病と去る日就日と慎べし

五 達磨忌 達磨ハ南天竺の人ハ蘆の
 葉ハ乗てりるにじり

禪宗を弘む大和十九年十月五日
 寂以委しくハ博物叢書出り

俳 禅意ハ達磨意志ハぬ僧有寛人
 在ニ多也 為るふおまろ中ハ返李破
 狂 小をまなのおぶつけるわけぬも
 さらりかしてさびさきうな 貞柳

残菊宴 延喜の御代ハ十月残菊
 の宴とりよはしたまう

哥 秋さける菊よはあれと秋を月
 耐ぬよ花のさくハうつけ。貫之

連 くれまいのさほ葉も菊の白ハ昌休
 俳 吾んて並くあるよハや菊の葉嵐空

狂 秋とよこ秋とつるやうごとくと
 ひりうしそりれ秋菊の宴 秀貞

十夜 此月五日より十五日まで淨土宗
 の諸寺にて會式と勤むとす

俳 皮豆袋の本をこめまきる十夜ハ白羽
 いろさぬお吉田お吉田十夜ハな麥里

狂 ころんくとおのさたけと答ふきり
 百万遍の流の流不さり 松子

六大興福寺法華會 一名山階寺 といふ九月

晦日より十月六日まで妙法の大會
とむくうしむ此大會八關院冬嗣公
初より六日冬嗣公長岡大臣れ
御忌日ある也其為行するもや

十讚金毘羅祭 讚州鴉足郡
日州 象頭山小神代

より御鎮座ある神々御神事八月
晦日より初より十月十日終之會參詣
別して多し故に李と云。金毘羅
道中記といふ本あり此本ハ金毘羅
參詣海陸の道中と委く記は柔
御利生縁記哥等まで委しくの凡

十南維摩會 南都興福寺にて昔
日都 より十六日迄行る也

哥白川殿七百首 新大納言顯輔
神を月時ぬらうおけるは法とて
あふ此都にのころそ乃そふ

俳諧をよめぬらうの杖のじし尾霜

二十不成芭蕉忌 俗姓松尾氏初の名
日就 半七後お忠左衛門
宗房と改俳諧と李吟ふ學子桃青
といふ江戸深川の庵お芭蕉一株を植
より是ふよつて世の人芭蕉の翁
とより尤俳諧中真の祖なり

三十御命講 法花會式もり
日蓮上人今日寂し故ふ
法花宗寺院におわく御影供を
修するもみえくおわく云俗お御
の字とそておわくといひるなり

俳頭もつたのやるとく念式な雨方
五十下元 今日と下元よりおけい七月
十五日中元の取よりなり

五十水官解厄 今日水官人間お降て人の
善悪をまじり天帝お奏
中出 神あつめ神あり
亥雲 大社神事 出雲國杵築村お

何り祭神大己貴尊に祭の當日
前より毎年風烈く波あつき日を

其日龍蛇藻りゅうだもも乗て海上うみも浮む
を取て曲物まがものも盛もりて神殿かみだも納いむ
いり其蛇へびも似て錢形ぜにがたの璣いん文もん
あり尾先おしりも魚いさなも似にくままるまじ

十京じゅうきやう 東福寺とうふくじに開山かいざんく
六都聖りくとも一國師いこくし忌 建仁二年十月

十五日生なまま弘安三年今日寂しやくに

非ひ通天てんてんの縁ゆかりをもや用山忌もちやま之白

十八日 此日このひ雞とり初はじくはりく時湯ときゆあまり
ままれれば長寿ちやうじゆ無病むびやうなり

廿日 不成なせ ○今日遠方とんぱうへ由よし事ことを忌いむ
就日しゆじつ ○天龍寺佛國てんりゆうじぶつこく国師こくしの忌日

廿日 惠ゑい比須講ひしゆかう △誓ちか言ごん文ぶん拂ひ ○此日商家このひけいあ
一統いつとうあまいい日ひとして我われ

と祭り酒宴しゆゑんを催もよほして客きやくをもまままりく
中なかかもも呉服店ごふくてんハ格別かくべつあまりくしくする
事ことへ商人しやうじんつつねねぐ欺賣おごひまの罪つみを拂ひふ
とて誓言ちかごん文ぶん拂ひともいいふ京きやうおおてて官者くわんしや社しゃ
よ詣よぎで是こゝを誓言ちかごん文ぶんががししの社しゃといいふ大坂
ああくくハ今宮いまみやの戒かいへ参詣さんぎ多おほし

非ひ夷海いゑう死し賣ばいに律りつ多おほせににり芭蕉ばしやう
十月じゅうがつの廿日にじふにちももううととをを妊女にんにょううなな巴桃ぱたう

廿五日 ○今日人の病このひひとのやまひとと事ことなりなりれ
○南禪寺なんぜんじの山忌やま行状ぎやうじやうハ博物ぶつ筌せんに

廿五日 京法勝寺きやうほうしやうじ大衆會だいしゆゑ。應仁おうえにの頃ころ寺じ絶たつ
り今いまハ本尊ほんそん藥師佛やくしにぶつ東坂とうさか下西教寺げさいけうじハハ

廿八日 不成なせ 榎尾えのび虫むし供養くやう 榎尾寺えのびじ明惠めいゑ
就日しゆじつ 上人じやうじんの関基かんきへ

晦日 神迎かみむかひ 非ひ後ごふふままははつつとと律りつ定朝じやうてい堂だう
△△御ご座ざのすす拂ひいいのりのり律りつ至暮しよ西さい

月令げつりやう 日ひふふりりここももららば十月じゅうがつ一ヶ月いっかげつの
雜事ざじととしします

御取越ごとりこし 十月廿八日親鸞上人御忌日也
正當日ただひハ本願寺ほんげんじ小こて報恩ほうおん

講かうを修しゆり一向宗いっかうしゆの檀家だんかハ報恩講ほうおんかう
と勤きんむむハ當月たうげつ取越とりこして勤きんむ故ゆゑ名なづづく

茶の場ちやのば △口切くちぎ三月さんげつふ茶ちやを摘と五六
上うへししハ九月くげつ以も諸国しよこくへ出いでで十月じゅうがつふハ

茶人ちやにん茶壺ちやうの口くちを開ひらく故ゆゑ口切くちぎといいふ

俳口切は場の庭ぞま門りき芭蕉
口切や袴のひびふ線苗葡萄其角

狂口切の葉とらあつぎて後むし
むししくのを返しちやくむらや 若室

巨燧明

△巨燧切る。巨燧とばうり
いハ三冬よりのるをり

時令

此部は十月の時候に
かゝる事をあつむ

初冬

十月三五日までとり又十月
の異名よもとちひ十月朔

一日は事をとりまうり

哥夫木

隆源

あきていよいよひが初夜いつのまに
かゝく社のさくわさるるん

類題

初冬を敷

範宗

あまより外山よをわいうぐらん
心本のうつらあきちなるなり

家集 山家初冬

俊光

あきまぬところのまふささふ山風に
まづれぢらちる庭がさびしき

詞冬いさふりるまをみかれぬ。冬は
初冬。あらしふきふ。冬の来て

きのよにまふる風。氷もこぼりて
ををむうる。今初よりふゆと

きのふを杖と。くふとふゆは
。初もまおとる。あきちるれぬ

初霜

△初霜きある。まおのこけ
妻一く冬の土下ニ記ル

哥冬あてま結びもくぬ初まおの
とてこれいるん風そよぐ。家衡

連

初まおの花もがり。重信は宗祇
俳初まおや取ふ織のあつり支考

狂

初まおのまおあるとても朝食の
著をかく同の程あをむけ立甫

時雨

△初雨あ。まおの初めて季に
なるより次の秋何のあふ△印

あ。まおのまおあ。まおのまおあ
。初雨あ。まおの初めて季に
。初雨あ。まおの初めて季に
。初雨あ。まおの初めて季に
。初雨あ。まおの初めて季に

ふる成りし秋のまよふる秋の
ぐれとて初ぐれといはず。
霖雨と云ふ小雨の姿にてあてし
ぐれよをあてごし

◎拾遺かきうし時雨をさあつ
けりいそやれかあひの森 貫之
千載「福あし七雅」のあつた
木の葉にうる夜まは時雨を 馬内侍
夫木「神」月夜さあつた雲よも
かしく夕ぐれのをら 宗尊

碧玉 夜時雨

雨もあつた雲はまよふへーや
時雨を夜の枕とあつん

雪玉 山時雨

みよき山ちりしも雪なりあつた
時雨つきくは方はうき雲

同 羈中時雨

移も去られてゆもあつた
くむ初のみまうつてやん

柏玉 河時雨

あつた雨も雨も別せあつた川
かきもやあつた村ぐれうか

同 野時雨

あつた移りゆもあつた村ぐれ
移もあつたてあつた

古今 袖時雨

神を月時雨あつたをあつた
あつたあつた人のたつた

玉葉 松風時雨

あつたあつた山の木のあつた
あつたあつたあつたあつた

同 泪時雨

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

詞△川時雨川時雨△袖時雨袖時雨

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

村時雨村時雨△小夜時雨小夜時雨

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

△榎時雨 風よあふよこ △夕時雨

夕時雨 △松風時雨 松風をいづれの音

△落葉時雨 おきらく葉の落る音

△志づれとどろく。志づれの糸。ゆがれ

△連時五字照日者あらしづれる宗砌

雪に於てはちあゆる世のいづれ心敬

△非 河ま此時あくたり用舟支考

初づれ猿も小葉とほげし芭蕉

△志づれ 時あふ風の交るる委しく

三冬此雪志づれの條おんぼし

△非 ちく小傘指車に志まじりや 闇指

△木枯 風と云。木枯しの風と傳う

ちあふ秋をふより俳よあをのまじり

△非 木枯のむく竹秋おゆるる芭蕉

△哥 千載詠ふたぎびりさまはる木枯ふ

葉のまじり風ありいこやき 定頼母

△液雨 唐閩中の俗立冬の後十日

と入液とす液とらうほふをり

△初雪 初雪きるる△初雪の魁恭

若ハ初雪はれハ下とら此

泰内せられりるをれと見泰といふ

△浅雪ハ聊者ハ此外きのゆに三冬の部お出

△哥 拾遺 景時

初雪をよてあづしとらる初雪あり

すけ山おふりや志ぬらん

新古今 瞻西上人

つひよりも志のやれおぞうつまら

くは初雪ありとらる初雪あり

△詞 ちりもむ。ひとある。初雪は。つとら

やぬ。ふりもつらぬ。初雪やぬ。初めつし

△連 初雪は庭のちりもはし 宗祇

△非 初雪にまふり糸の妻ハ其角

初雪やけいひい席おをるんさ

初雪や浪のうぬ岩の上 淡々

初雪やる糸同傘の初雪見 如水

初雪や木地挽く谷の夕烟 紹簾

△詩 初雪詞

瓊林瑤樹忽珊珊 急帶西風下

晩天

夕マノハヤレニ夕ノ木ガハタカト
オモフホドオモヒガケナウキラク

スレバキウニ西風ニツレテハツ
ユキガフツテキタノシヤ

柳絮三冬先北地

ヤナキノワタガ冬
ノウチカラキタグ

ニニハヤ

梅花一夜遍南枝

ムノノハナ
ガヒトヨサ

ノニニ三十三ノエダニサキソロウタカト
オモヘバハツユキガフツタノデアツタ

初氷

△初氷解。氷のうけ妻
冬十三日よひ

◎哥 千載「きのふも秋はれしうい川乃
まにいこぬの水は清き水もん 公實

俳

行舟の一夜とありや初氷 里隱
初氷を解はまがまる松乃 風 韓悪

狂

もろ種彦ふとみぢの上三叔
むまいそあふるむもかむの那 貞史

冬ごさ

冬ごさハタホしあれどりふん
冬ごさびりたあらにあら

冬籠

冬籠本まに花をふれて精気
地中どのををををのりといふ

又一説よ冬ふなれば家の内ふりり
かることをもりりし季ハ三冬ふしては

哥

雪ふれば冬ごさりりせる料も本を
まよふたれぬ花が咲ぬる 貫之

△冬もろくたぬる紅葉ふたに 雪を
庭の々々きもををををり 崇徳院
御製

俳

令屏の松の古びやみさゆ 芭蕉
山嵐は山嵐に方よをををりり 支考

△冬ごさハタホしあれどりふん 野水
冬ごさびりたあらにあら 鶴十

△冬ごさハタホしあれどりふん 馬行
冬ごさびりたあらにあら 西鶴

冬構

冬ごまハタホしあれどりふん
冬ごさびりたあらにあら

事をして寒をさせぐ支度をする心
俳を構外も梅の雪がまへ 白扇

関北窓

北風ハタけしきりのゆへ
北風をよける支度

草木

此部十月の草木を集む
印する冬三月の景物を用ひては

名草枯 △葛うら △菊うら △薄うら

△萩うら △女郎花うら △押うら

御傘よ花の字結べ秋とどり

俳女えふ叶もつ時もあり鬼貫

冬椿 △早咲椿椿の花ハ春之冬開

者ぞ早開と名て人賞之といふ

残菊 九月咲のころうら菊ちり

哥夫木 貫之

秋さげの菊よあれど秋を月

一ぐれよ花のまはほける

狂一とせの花のかぎりを秋葉に

ふ代の粒ふと秋りまよよ 舊徳

詩 残菊詞 唐太宗

細葉彫輕羽率團花飛碎黃

還將今歳色復結後年芳

細カキ葉がシボミナガラ青キイロアリハナノ

コトシハコレガナゴリナレドモ又来年コノイロカ

ヲモツテサケヨト心ニチギル

詩 残菊五字對句 同上

闌珊陶令宅 晚彫霜凜冽

寂莫費公房 曉逐露離披

冬牡丹 △寒牡丹。十月ころ花さく

十二月までもあり 大和本州よ

哥 雪中牡丹 元政

狂 さむさうな形りふ咲くく白き牡丹

花の風氣とりふづりたるよ 麥峯

俳 重ねる世ても寒を記ぬ牡丹一菊

大莖花 ○石路も書く 俳 ちり穴ふ

狂 口なしのまよ咲しをいふよ

冬と菊 △寒菊。多く花ハ重く葉

たりて赤を賞は 名雪見艸

○秋無艸上。霜見艸傳。○のこり艸 藁

○初見艸 藏玉は出志の初見艸 説多し寒艸の事

○哥 夫木

式子内親王

白きころはだといふゆゑのしら雪

藏玉 初見艸

黒がれふる雪ふくししも初見艸
花咲くよりいふおやまらうん

○連 雪をきくぬ菊さく谷の南うな宗碩

○俳 雪にちかき天窓の上ふ菊の杖 嵐雪

後殿のつよもみするやまの菊 梅翁

○狂 ちちてはねのふかき五流

ちちよおころうかん菊の花 嘉友

○詩 寒菊七字對句

詩礎

顔色却因風露染 愁雪葉

ハチノイロハケツウニカセヤツユデ 雪ライヤガル

英華不畏雪霜欺 傲霜枝

ハナフサハユキヤシモノアナドル シモニヨハラ

水仙花 千葉あり單葉あり一重の
物花白く花心黄く

○俳 水仙ふあの日床し蔭子紙 支考

ふら仙や一りと花と思ソウ 舊園

○狂 竹えの云月心かくちむ免つゆ

まおおろふあ仙のもれ 計白

○詩 水仙七字對句

詩礎

臺蓋元非千葉種 付雲來

コノ水仙ノヒトヘハハナハモトヨリ

羊容要是小蓮花 不染埃

ホウヨウカズズコレ

○俳 八手の花

葉の岐七八あり形紅葉の
葉ふ似く大いなる姿あり

花白く小ちくして黒實のるなり

○俳 つくぢひふふの花や水まづり荷風

妙おろりとろり人此木の葉よ六

薬字の名號をうきつひのぶとく

せんじく 數杯飲へ志なうくし

てたくとく吐し忽ちおろりおつる

寒梅 十月の季ふ入る俳書も有
十月もは委しく十月の論者

枇杷の花 白き花よて八月より咲
はじめ十月頃盛よて

臘月までもある花の葉ハ四季とも
小散ら子実ハ五月より花の頃より

実の熟するまでの間凡十月むり
る故自然とよく熟して味いよし

俳 脱肛の廁ハ枇杷の花見ると鬼貫
あるさんてふに也品せし枇杷のふ紹藤

狂 くのすにいとをわけてむびこの心
ぼろろくと落るまがらし 遊野

室の梅 室咲室の温氣とく
室のすにいとをわけてむびこの心

俳 室とめて面ぎさう花のま季四
房糸のま花子のねや室の梅林而

槿の花 木と煙とて蚊やり
とすれゆふゆとしく

油とらる物はいぬりやめて食ふ
べうら小本よてよく実を結ぶ

俳 いつそぬよ此室小槿のま立甫
山より槿の花をやらお乃朝山川

散紅葉 紅葉散。紅葉散て物と
染る冬くと御傘よ出さる

哥 古今西川よみよふは流るたぐ
山のちがげのねど今まきるし

千載 都ふはまきまきふてんし
ども紅葉ふちりしく必川の冥 頼政

連 秋を月ちりらひのころ紅葉ふ小肖柏
らりちりら紅葉ふふけるらり小宗碩

俳 戸を叩くもふえありまぬ紅葉路外
物の音せめて二おををたぬ紅葉曲巴

狂 かしきとばちりしく庭の上かきを
めりてあらしうらもやはたれ貞柳

麥時 漢土ハ秋種を下せとも
本邦十月小下して四月

黄熟ハ是亦早中晩の異有。
日本後紀稱徳帝大臣吉備小勅

ありて天下の百姓ふ大小の麥を
種しむといづも其時をうしむ

て遂不成其後嗟我帝弘仁十一年冬嗣公に勅ありて今より八月

小時べしと是より時と不笑といふ

非 妻前やあるふ自らう一人之朔平

枯蘆

詩よ、寒蘆とらふ

西行

げの玉の蘆皮れまほまされや

らしの枯もよ風やうら

あふくちりおきしな蘆皮はの

あざばすしぬ蘆の村立成通

蘆皮ごけの蘆をわづれてたふの

控舟あられふより 二條院讃歌

詞 ぞおの下なる蘆。風をく。きられ声

こふれ声。ぞおのれ声。あふおれす

非 ひまあれどむて人良陽の芦鬼貫

幼あおやきをれちるはつみ支考

狂 草も木もささささささささささの

秘ぎるおのしもされ合ふより貞木

枯柳

枯柳、文と柳と同じ公を

哥 萬葉到わづれのをれ柳ハる

人のわつらふすくりえふくらうな

狂 ちるあれがまはなし芽は枯柳

柳人ひとくまてなるも 樂自

非 詩あおむてまや枯柳 五樓

おちて 落葉

諸木の葉風まちりゆくを

△ 三六〇

ともつらう 立田川よる流もせきう

いづりちりもれねもつらう

詩 落葉七字對句

風林脱葉 山容瘦

霜相稻登場 野色寛

雪雲映月 鱗々色

霜相葉飛空 威々聲

哥 未だぬをて一葉あはれなきを山ハ

中く風の音もきこへ 和泉式部

連 神書月の交まある海草のま智蓋
とくまおれ白くともなはるる草の宗砌

俳 一葉ちつりつらちつりて月夜に嵐
かしの木の本の葉は別る用も井桃戸

狂 為風のさむいけふは極一葉さむい
かけ落る葉と見ゆる天の寺徳存

木の葉 △木葉舟 △木葉衣。木の葉は
つげ申うけて木はある葉とも

いどそれ、和哥などふていふ事、俳の季は
出づるものりて落るる木を葉といふは

木葉衣ハ木の葉を衣とよむ故事は
又仙人など木の葉を衣とよむ故事は

木葉舟ハ舟と一葉といふて立秋の條
に一葉舟の故事あり考合は

木の葉の雨 △木葉時雨。雨のふる
ごとく木の葉のちるをいふ

詩 風吹枯木晴天雨 白氏文集
風が枯木ヲ吹ケバ晴タル空方雨ノルヤウナ

連 そあくしてちるも耐ぬの木葉の如 宗祇
俳 客ある三葉とよむ木葉う那 芳室

狂 人多くぞ木の葉をさむいなるそん
喰をい月ののりやこたり 貞左

朽葉 木の葉の地上は落てち
たがら葉のちるをいふ

哥 夫木朽まれぬ朽葉は下にも
まりて朽葉吹ゆる庭の木は 為相

俳 散りてちる葉のちるをいふ 矩州
狂 ちる葉もたたくて朽葉の口惜や

口惜やとて朽葉のちるをいふ 舊徳
又蕪菁ともいふ 俳 宙の葉

蕪 根のあらはるる葉の 鬼貫
狂 ちる葉のちるをいふ 貞室

大根 △大根引△おろし。蕪に似て根
大之故大根といふ 蕪 蕪蘿蔔

俳 子乙女が書とるる大根 野坡
子乙女が書とるる大根のちるをいふ 宗離

冬木の櫻 冬咲くちるをいふ

雪の下

花田月鴨足野同物まじり葉を冬も盛る雪のい名ふよて季は

柵の花

いらとハ部ノ葉に刺有故

生類

此部ふ十月一ヶ月の生類をあらめ出

鶯子啼

非人の子れなく好よ

狂 冬もハさすがは花のむいづを

必用

此部ふ十月一ヶ月の天氣の見やう其外必用の事とのに

破	夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
方	戌ノ方	亥ノ方	子ノ方
破	朝六ツ	朝五ツ	昼四ツ
方	辰ノ方	巳ノ方	午ノ方
破	昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ
方	未ノ方	申ノ方	酉ノ方
破	暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
方	戌ノ方	亥ノ方	子ノ方

時刻 戌の日戌の刻亥の日亥の刻 事ときふ用ゆる事なよき

出行作事

東方小向ひてより 天道東よ行月へ

樂事

小春の長閑なるに面を 北よりて烘々たる日光に

脊をゆるして暖和を得るハかの 負暄黄綿襖子と昔の詞むむぐ 瓶は酒をあつてり獨酌あるハハ 對客炉辺のまよぬは風寒を志の ぎてハ春和りもゆるす又枯枝ハ くり咲花のけーきめづらうあり

天氣

今月末よりの西風十日も づきて大まけふちる物之

西北の風ハ日和をつうさぐる紫乃 雲うてバ大風く戌亥の日雲あれハ風 生び。電あれハ大風あり。今月ハ雨の 後ハ風吹く東南の風ハスーラバ

占候

虹あれハ不作よて五穀貴し 初のきのねにぬられば

その冬ハ小寒バ。十五日晴るれば 冬ハ大よあさうちり申の日寒

うらぐらねバ暴死多し。東の雲
たてばらばらもいあり

養生 此月暖帽をいきてく事
なうれ腦を冷すべし眩

暈の病ありみより針灸を
くづべ血澁して津液めづす座

臥西方よ向ふべしかるべ房事
をつゝむ事とまらざるべ

衣服 当月より綿入を著るべし
移菊表紫黄紅葉表藜

生花式 残菊。茶花。寒葵
隈笹。霜ふり五葉

寒竹。かしま松。唐松。大山楡
つハの花。ゆつり葉

○此月紅柿の仕やう。梨みうん
たくまやう。香の物漬やう秘傳う

どく。梔子。木芙蓉やう(やう種
蒔の品く其外当月用意の品

并小養生の仕やう等委しく具
歳時記。知術全書等小出故略く

十月部終

十月飲食並料理献立

禁山椒と多く食へハ血脉と
物破る○ふら食へハ涕多

く出る○霜ふ枯るる菜と食
へハ面のいろぬ損どとやう

好物 今月芋と食して益あり
○雀肉冬三月これと食

へハ陽道とたこし人として
ふめくしひるやう

料理 汁 煮つけ かせ
煮つけ かせ

小豆 小豆 小豆
小豆 小豆 小豆

あいな やうたご
あいな やうたご

清汁 清汁 清汁
清汁 清汁 清汁

膾 膾 膾
膾 膾 膾

ふま細つらう
うどむらうほ
本々け

ぼらひらひり
うどむらうほ
本々け

白うねらうど
本々け
杉社まらうほ

かひこまらう
本々け
せうがど

差味

かた・朝・花がうね
あけいさうらうほ

あびきまらうど
本々け
まんぞす

うねい・むどき
せう・まんぞす

射・あけ
まらうど
まらうど

かき水とまらうど
大こん・いさけ

煮物

鴨・あけ
しんらうほ
厚
ひらけ
移る

大まらうど
本々け
まらうど

あたまき
ごんまん・本々け
まらうど

きんこ細つら
きすご
ゆりね

あの一ろ
まらうど
しんらうほ

和會物

ちうだう
せんごほ
まらうど

さめらうど
せんせう

いさあび
あけ
まらうど

たこ
本々け

ムー
ごんまん
まらうど

吸物

大こん
まらうど

赤うい・茶せん
かきしき

鴨
せんまらう

か
まらうど

れう
あけ
まらうど

精汁

まらうど
まらうど

長い
まらうど

あげ
まらうど

大こん
まらうど

わり
まらうど

清汁

ゆりね
わらうど
小梅
まらうど

実ら
まらうど

松
まらうど

志
まらうど

膾

大こん
あけ
まらうど
まらうど

くらん草。きくく。つひえんはやくいさか

たまひも 枕かけ

差味

さしこ ざあんぼう

さう栗 せんごわう

煮物

にもの ほふ

ほり竹のこ いらやうすよめ

和會物

あひの まな

吸物

あひの ろんあ

あひの きん

時魚

あひの ろんあ

あひの きん

青物

あひの ろんあ

錦囊

あひの ろんあ

防風

あひの ろんあ

くらん草。きくく。つひえんはやくいさか

枕かけ

錦囊万家節用寶

全一冊

此書初メニ書始詩哥。四躰ノイロハ

易ウラキヒ。華道大意。百官名目。

手形案文。進物書附仕ヤウ。名頭字。

月ノ異名其外人家日用重宝ノ事八十

箇條アツタ。次ニイロハ分ケ早引節用

集ヲノヤ第三ニ天地万物ノ繪本ヲ出

ス此繪本ハ上ハ日月星辰。雪。雷。雨

ヨリ山川宮寺人物艸木魚鳥獸地

震ノ圖ニテゴトクノセ人物ニテモ

日本バカリニアラズ唐天竺ニテ

千世界ノ人物ニテゴトクノセ

モ天地ノ間ニアラユルモノハコトクノセ

國ヲ出ス終リニ年中行事トテ諸国

神佛ノ祭禮縁日クワニク出ス

詞用集

全一冊

狂哥能借ノ詞寄ノ書ナリヨモモノ縁ノ詞

ヲ集メ古哥ヲ引註ヲ加ヘ大ニ便ニテ九書ナリ

